

---

# 暁が照らす日々

アストレイ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

暁が照らす日々

### 【Nコード】

N6165Y

### 【作者名】

アストレイ

### 【あらすじ】

IS学園に一人の転校生が来た。転校生の名は暁 慶介。天才である彼には裏の顔があった。それは……  
(初投稿なので文章がおかしかったら指摘してください)

## プロローグ

- とあるマンションの一室 -

カタカタカタ・・・

機械に囲まれた部屋の中にキーボードのタイピングの音だけが響く

カタカタカタ・・・カタツ

「これで終了つと。」

俺の名前は、あかつきけいすけ 暁 慶介

この部屋でISの開発をしている。そして・・・

「さて、IS学園に行く準備をするか」

世界で2人目のISに乗れる男なのだ！！！！！！

最近、日本でISに乗れる男が見つかったという事で俺も全世界に発表してみたのだ！！！！

まあ、案の上IS学園に入るように言われたが。

ちなみに、今回見つかった奴より前に俺はISを動かしたが、まあ、面倒だったので発表しなかった。

そして、俺のISの名はあまてらす天照

待機状態はブレスレットで、俺の右手首に巻いている。

「えっと、持って行くのはこれとこれとこれでいいや。  
さてと、今夜もよろしく天照。」

そう言って、俺は今夜も夜空に飛びたった。

―数分後、IS学園―

「織斑先生、織斑先生大変で〜す〜す〜!」

「どうしたかね、山田先生?」

「それが、また執行人が現れたそうです!」

「何?また出たのか?」

「は、はい。今度は横領をしていた企業の社長が殺されました。」

「そうか。分かった。この件はIS委員会に任せる事にしよう。  
私達の仕事は生徒の教育であって、犯罪者の逮捕ではない。」

「はい。ところで、明日来るっていう転校生については何か分かり  
ましたか?」

「そのことなんだが・・・何も分からん」

(まったく。どこを調べてもここ2、3ヶ月の情報しかないとはど

ういうことだ？

「そうですかあ〜。でも、明日本人に聞けばわかりますよ」

「そうだな」

## 1話―入学

「はあ〜〜疲れた〜〜」

今、俺はIS学園の前にいる

IS学園とは、その名の通りISの操縦者を育成するために造られた学園だ。

「それにしても。でかつ」

(俺のロシアの地下にある研究所ぐらいあるんじゃない?)

そんなことを考えていたら

ふと後ろから殺気を感じたので後ろを振り向いてみる

「おそい」

そしたら、黒い板で殴られた

「いつてえ〜〜〜〜〜」

「お前は何分遅れたら気が済むんだ」

この人、誰?

んっ、良く見たら俺の頭を殴った黒い板って出席簿じゃんか

ってことはこの人はIS学園の教師ってことだね

てか、出席簿ってこんな威力のあるものだったけ？  
マジで痛~~~~~

「あ、あの〜。IS学園の教師でいらっしやいますか？」

「そつだ。私が今日からお前の担任になる織斑おしじま千冬ちふゆだ」

「は、はい」

「まあ、返事はしっかり出来るようだな。よし、私について来い。  
教室まで案内する」

やばい。俺死ぬかも。

〜数分後〜

「ここがお前のクラスだ。私が呼んだら入って来い。」

そう言つて鬼もとい織斑先生は一年一組の教室に入つて行つた。  
そしてすぐに頭を叩く音と悲鳴が聞こえた。

「これからSHRをはじめます。まず最初に、転校生の紹介をした  
いと思います。」

いや〜副担の山田先生は優しそつで良かった。

「暁君、入ってきてください。」

呼ばれたのはいますと  
やっぱり全員女子かあ〜

いや、良く見たら男子が一人いるじゃんか。良かったぜ〜

「じゃあ、暁君。自己紹介を」

「これからお世話になります暁 慶介です。趣味は機械弄りです。  
これからよろしく願います。」

ほとんど女子だから固くなっちまったぜ。

『おっ』

「お？」

『おとこだ』

『』

(うるせー—————  
——)

まったく鼓膜がやぶれるぜ

「やったー。二人目の男ゲット」

「しかも、めちやくちやイケメンだー」

「さっそくアツタクしようー」

なんで、こんなにうるさいんだよ。女子って。

それと、三人目の奴。本人の前でそれはないと思うよ？

「貴様ら、うるさい。そんなに元気があるならグランド10周して



こい」

この鬼の一声でクラス中が静かになった。

マジでこの人はやばい。

「暁、お前は織斑の隣に座れ」

「は、はい」

織斑ってあの一人だけいる男子が。  
良かったーーーーーーー！。

「慶介って呼べばいいのかな」

「ああ、それでいいよ。僕は一夏って呼べばいいかな」

「ああ。これからよろしくな」

「こちらこそ」

一時間目のIS基礎理論の授業が終わった。

それにしても暇だなあ~~~~。

だって、俺ISを作っているんだぜ。

基礎理論なんて完璧に覚えている。

そう思いながら横を向くと一夏が頭から煙を出していた。  
もしかして、こいつまったく分からなかったって感じか？

「おい、一夏。お前もしかして、まったく分かんなかったのか？」

「……………ああ」

「そうか。」「愁傷さま」

「そういうお前はわかったのかよ？」

「あたり前よ！こんなもんも理解できないとやばいぞ」

「はあ……………どうしよう」

「なんなら、俺が教えてやるぜ！」

「マジで！助かるぜ」

「一時間１０００円だけだな」

「高っ」

「まあ冗談だ」

「よかったあ〜」

「ほんとは一時間１０００円だー！」

「結局金とんの」

何言ってるんだ、こいつ。世の中かねがすべてに決まってるじゃん！

「で、どうすんの？やるの？やらないの？」

「お、お願いします」

しゃあ！これで今月の財布は助かったああああああああああ

「がす！」

いったああああああああああああああああああ

「こら。学校内で商売するな」

チツ。なんてタイミングで来るんだこいつは。

「席につけ。授業を始めるぞ」

はあ。またつまらねえ授業だ。

調子に乗って発表するんじゃないやなかつたなあ~~~~

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6165y/>

---

暁が照らす日々

2011年11月19日10時55分発行